

小中一貫教育における教育相談の在り方 —児童生徒の発達段階に応じたSSTプログラムの試案作成—

竹内 博行
(府中市立第一中学校)

問題と目的

平成20年度より所属校において小・中学校が連携をした小中一貫教育が行われる。これを受けて、小・中学校の9年間で継続的な教育相談の展開方法を検討し、教育相談の一つの在り方を提示したいと考える。

近年、学校現場において不登校やいじめなど学校不適応や問題行動の低年齢化は深刻な問題であり、児童生徒の対人関係のあり方が、社会的にも解明が急がれる重要な課題となっている(佐藤ら, 1999)。このような児童生徒の問題を受け、学校現場において心理教育的援助が行われ始めており、予防・開発的視点から、ソーシャルスキル (Social Skills) という考え方が注目されている。

ソーシャルスキルとは、「人間関係に関する知識と具体的な技術やコツ (相川, 1999)」であるとされ、「対人的な能力や対人行動は、学習によって獲得されるものである (相川ら, 1996)」という学習理論に基づく考え方を、その理論背景としている。また、児童生徒のソーシャルスキルを高めることによって、人間関係上のトラブルから引き起こされる諸問題の改善を図ろうとする試みとして、ソーシャルスキルトレーニング (Social Skills Training: 以下SSTと略す) が盛んに行われるようになってきている (江村ら2003)。SST研究の多くは、小学生を対象にクラス単位で実施されてきており (渡辺ら, 2003)、中学生を対象に、クラス単位で長期的・体系的に行われた研究は極めて少ないことが指摘されている (江村ら, 2003)。今までのところ小・中学校を通じて学年に応じた系統的なSSTのプログラムについて十分な開発はなされておらず、小野寺ら (2003) は、学校現場でSSTプログラムを展開する際の課題として、児童生徒のソーシャルスキルの発達段階を明らかにし、それに基づいたプログラム展開の必要性を指摘している。したがって、小・中学校9年間という長期的な見通しをもって、児童生徒の発達段階に応じたSSTを展開することは大変意義があるものと考えられる。そして、小中一貫教育は、義務教育9年間で計画的かつ継続的に教育活動を展開できるという特徴をもっており、小学校と中学校を通じてそれぞれの学年に応じた系統だったSSTプログラムの施行に適した教育態勢であるといえる。

そこで本研究は、小中一貫教育において予防・開発的教育相談を展開するにあたり、SSTのプログラム作成に焦点を当て、小・中学校の教育目標、子どもの発達段階および小・中学校の教員への調査を通して、総合的な検討を行い、児童生徒の発達段階に応じた系統的なSSTプログラムの試案作成を目的とする。

研究 1

目 的

小・中学校における、学級・学年教育目標を分類し、小中一貫教育におけるソーシャルスキルトレーニングの構成要素およびターゲットスキルの選定を行うとともに、それらを発達、成長に関する特徴を考慮してさらに系統的に分類することを目的とした。

方 法

所属校区各校（小学校5校・中学校1校）の学校要覧をもとに学級・学年教育目標を学年ごとに分類し、ターゲットスキル選定をした。また、先行研究および文献をもとに、発達、成長に伴う子どもの行動様式の特徴を、低学年、中学年、高学年、中学生ごとに分類した。

結果と考察

各校の学級・学年教育目標の社会性、対人関係に関する内容の中から、各学年で最も多く掲げてあった項目を取り上げ分類した。低学年は、あいさつや友だちと仲良くするといった、基本的マナーやルールを身につけることや仲間関係の形成について述べられていた。中学年は、友だちの思いに共感するなど、相手への共感的な関わりや関係の維持について述べられていた。高学年は、お互いを大切に認め合いながら協力できるなど、協力関係の形成について述べられていた。中学校は、小学校で述べられていた教育目標の確立や社会の一員として責任ある行動がとれる態度の育成について述べられていた。このことから、各学年において児童生徒に身につけさせたい行動は表1（上段）のようにまとめることができると思われる。

これらの、教育目標の分類を通して、望ましい人間関係形成のため、卒業時までに身につけさせたい対人関係能力の重要な構成要素として、「対人関係や集団生活における基本的なマナーやルール」「相手の考えや気持ちを理解する」「自分の考えや気持ちを伝える」の3点を挙げるができる。また、人間関係を育んでいく上で、対人的なトラブルや葛藤は避けられないものであり、対人的な問題への対処能力を身につけることは、よりよい対人関係を育む力を身につけていくことであるといえる。そのため、「対人関係問題の対処法」を構成要素として取りあげる必要があると考えられる。以上、4つの構成要素は、先行研究における相川ら（1999）の知見と一致するものであった。

一方、発達・成長に関する特徴も、教育目標同様、社会性、対人関係に関する内容について分類を試みた。その中で、発達、成長に関する特徴のあらわれは、特定の学年においてのみ見られるものではなく、学年にまたがって見られていた。したがって、発達段階において最も顕著にあらわれる特徴を各学年ごとに分類した。その結果は、表1の（上段）のようにまとめることができると思われる。

表1. 小中一貫教育における児童生徒の発達段階に応じたSSTプログラム

	低学年	中学年	高学年	中学生	
教育目標	基本的マナーやルールを身につける。友だちと仲良くする。	友だちの思いに共感しお互いの良さや違いを認め合える。	相手の気持ちを大切にしながら発言や行動し互いに力を合わせて高まり合う。	相手を思いやる優しさを育てる。周りと協力して物事に取り組む。社会の一員として責任ある行動がとれる。	研究1
基本とする考え	小学校に入ると遊び相手としての仲間の比重がますます大きくなる(木下, 1992)。遊びを通していざこざやけんかといった対人的経験を繰り返す中で、社会的スキルを獲得していく。仲間に入り、仲間と一緒に行動する楽しさを体験することが大切(堂野, 2000)。	自分の判断や行動のよりどころを、仲間・友人へと移していき、仲間集団に属したい、仲間から受容されたいという欲求が強まる(井上ら, 1997)。仲間の気持ちに敏感になったり、仲間と共に行動する行動が目立つようになる。仲間の気持ちを考えたり、共感するといった体験が必要である(堂野, 2000)。	相互理解や受容、親密な自己開示が期待されるようになる(松永, 2004)。友人との共感や衝突を通してルールを体得し、社会で生きる人間関係力の基盤を作る時期である(石川, 2003)。助け合いや秘密の分かち合いといった、遊ぶ以外の親密さや信頼の関係になる(矢野ら, 1993)。	感覚、感情、行動を共有し合いそれぞれの特徴を互いに認識する。協力関係を形成し、喜びを共有する集団のやりとりが児童期以上に洗練され、有効なものとして機能していく必要がある(川原, 2004)。親密な友人関係をもてるようになることが、児童期から青年期への社会的発達の一つといえる(木下, 1992)。	
教員のニーズ	ありがとう ごめんなさい あいさつ	ルールを守る 仲間の誘い方 仲間への入り方 聞き方	あたたかい言葉かけ 注意する 援助 頼み方 断り方 問題解決 主張		
スキルの配置			頼み方 断り方 主張 問題解決	相手の気持ちを考慮した仲間の誘い方 友だち関係がより良くなるためのあたたかい言葉かけ 相手を尊重した頼み方 自分も相手も大切にした断り方 主張的な問題解決の方法を考える	総合的考察

□ ・ ・ 導入期 (基礎トレーニング)

■ ・ ・ 定着期 (実践トレーニング)

研究2

目的

研究1の結果を受けて、ソーシャルスキルに関する小・中学校の教員のニーズ調査を行い、教員から見た、ソーシャルスキルの実施時期について発達の視点から検討することを目的とした。

方法

調査題目：小学生・中学生の社会的スキルに関する調査

調査対象者：所属校区の小・中学校の教員96名（小学校5校69名，中学校1校27名）を対象に調査を行った。

項目の選定：研究1の結果から得た4つの構成要素をもとに、児童生徒が獲得すべき具体的なソーシャルスキルとして、佐々木ら（2005）を参考に14のスキルを選出した（表1参照）。4つの構成要素に該当するスキル項目を次に示す。「対人関係や集団生活における基本的なマナーやルール」は、ありがとう、ごめんなさい、あいさつ、ルールを守る、仲間への入り方、仲間の誘い方、聞き方の7スキル、「相手の考えや気持ちを理解する」は、あたたかい言葉かけ、注意をする、援助の3スキル、「自分の考えや気持ちを伝える」は、頼み方、断り方、主張の3スキル、「対人関係問題の対処法」は、問題解決スキルがそれぞれ該当する。

質問紙構成：質問紙には、まずフェイスシートにて、回答者（教員）の所属学年、経験年数をたずねた。次に、「小中一貫教育における小・中学校の9年間で、ソーシャルスキル教育を実施すると仮定して、子どもたちの実態、発達に即したソーシャルスキル実施するために、小学校・中学校の授業で子どもたちに9年間を通して身につけさせたいソーシャルスキルについて、ご意見をいただきたく思います。つきましては、小・中学校の先生方共に、すべての学年（低学年～中学生）について、ご記入下さい。」という教示文に続き、佐々木ら（2005）による14のスキル項目を列記し、それぞれのスキルについて低学年・中学年・高学年・中学生という4つの枠についてそれぞれ「①この学年までに身につけてほしい」「②この学年までにはある程度身につけてほしい」「③この学年で身につけていくことが適当である」「④この学年ではまだ不十分でもよいと思われる」の4段階評定を行ってもらった。

調査の手続き：2005年8月下旬に、所属校区小中一貫教育推進協議会事務局会にて、調査について説明した後、調査協力を依頼した。9月上旬に各校において調査を実施した。

結果と考察

所属校区の小・中学校教員96名の回答結果を表2にまとめた。表には各項目の選択人数が示してある。各項目への選択人数が80%以上のものを多数回答項目と定義すると、中学年までに身につけてほしいスキルは、「ありがとう」「ごめんなさい」「あいさつ」の3スキルであった。高学年までに身につけてほしいスキルは、前述の3スキルに加え、「ルールを守る」「仲間への入り方」「仲間の誘い方」「聞き方」の4スキルであった。中学生までに身につけてほしいスキルは、前述の7スキルに加え、「あたたかい言葉かけ」「注意する」「援助」「頼み方」「断り方」「問題解決」「主張」の7スキルであった。これらの結果を基に、スキル配置を考えた場合、多くの教員が各スキルを身につけてほしいと思っている学年の1学年前期前の段階に当該スキルを配置することが適当であると考えられることから、表1（中段）のようなスキル配置を行った。

一方で、小・中学校の教員の回答からは、小学校の時期に14スキルすべてを習得させたいと考えていることが示唆される。本研究の結果から、現場の教員は、小・中学校の9年間でソーシャルスキル教育を実施する際、小学校の時期を最も必要な時期として捉えていると考えられる。また、学年ごとに習得させたいスキルに差が見られた。例えば、「あいさつ」は低学年、「問題解決」は高学年で習得させたいスキルとして取り上げており、このことから、小・中学校の教員は、児童生徒の実態や発達段階をある程度考慮したうえで、各学年までに身につけてほしいスキルを選択していると考え

られる。

以上のことから、各スキルをこの学年までには習得させたいという到達目標については、小・中学校の教員より、一つの指標が示されたと考えられる。

表2. 小学生・中学生の社会的スキルに関する調査

	低学年				中学年				高学年				中学生			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
ありがとう	69	15	12	0	85	11	0	0	96	0	0	0	96	0	0	0
ごめんなさい	62	23	9	2	85	8	3	0	93	2	1	0	95	0	1	0
あいさつ	60	18	17	1	79	15	2	0	92	3	1	0	94	1	1	0
ルールを守る	34	36	26	0	67	26	3	0	92	3	1	0	95	1	0	0
仲間への入り方	16	38	33	9	48	32	16	0	79	16	1	0	93	3	0	0
仲間の誘い方	19	33	31	13	47	31	16	2	81	13	2	0	91	5	0	0
聞き方	19	29	38	10	45	40	11	0	84	10	2	0	92	4	0	0
あたたかい言葉かけ	20	24	38	14	38	34	22	2	74	21	1	0	89	7	0	0
注意する	18	27	34	17	38	37	20	1	72	23	1	0	88	7	1	0
援助	20	23	38	15	34	42	18	2	76	18	2	0	91	5	0	0
頼み方	10	29	29	28	33	29	33	1	69	22	5	0	87	8	1	0
断り方	9	27	38	22	31	38	26	1	69	24	3	0	82	13	1	0
問題解決	5	15	40	36	16	39	35	6	56	32	8	0	87	8	1	0
主張	3	17	30	46	13	35	41	7	52	37	7	0	82	13	1	0

総合的考察

プログラムの構成

研究1と研究2で得られた結果を総合的に検討して、スキル配置を行った。その結果を表1（下段）に示す。スキル配置は、研究1の発達の観点に基づき、研究2で示された教員のニーズを到達目標として行った。また、スキル実施に際して、導入期、定着期を設けた。ターゲットスキルの配置は、まず、「ありがとう」、「ごめんなさい」、「あいさつ」の3スキルについては、全学年において必要とされる基本的スキルとして配置した。低学年には、「ルールを守る」、「仲間への入り方」、「仲間の誘い方」、「聞き方」の4スキルを、中学年には、「あたたかい言葉かけ」、「注意する」、「援助」の3スキルを、高学年には、「頼み方」、「断り方」、「問題解決」、「主張」の4スキルをそれぞれ配置した。中学校については、小学校で選定した14スキルの定着と中学生の発達段階から実態に即したスキル内容の配置を行うものとした。

スキル配置についての理由およびその有用性について

研究2の結果から、小・中学校でソーシャルスキル教育を実施する際、現場の教員は、小学校の時

期を最も必要な時期として捉えていることが示唆された。また、金山（2005）は、予防・発達の視点からも、小学校段階での基本的ソーシャルスキルの習得が重要であると指摘している。したがって、研究1で示した発達、成長の特徴を基本として、まず、小学校段階についてスキル配置を行った。

「ありがとう」、「ごめんなさい」、「あいさつ」の3スキルは、最も基本的なスキルであり、人間関係において欠かせないものであると考えられる。このことから、低学年への配置が考えられる。しかし、これら3つのスキルは、研究2の結果において、中学年から中学生まで一貫して多くの教員が「この学年までに身につけてほしい」と評定しており、教員から見ると、どの学年においても人間関係を築いていく上で欠かせないものとして捉えられていることが示唆された。したがって、3スキルは、全学年において必要な基本的スキルとして配置した。低学年は、遊びを通して対人的経験を繰り返す中で、社会的スキルを獲得していく時期であり、仲間と一緒に行動する楽しさを体験することが大切な時期であると考えられることから、「ルールを守る」、「仲間への入り方」、「仲間の誘い方」、「聞き方」の4スキルを配置した。小林（1999）は、新しく人間関係を形成し、維持していく上で重要なスキルであると述べている。中学年は、仲間の気持ちを考えたり、共感するといった体験が大切な時期であると考えられることから、「あたたかい言葉かけ」、「注意する」、「援助」の3スキルを配置した。小林（1999）は、共感的なかわりを通して親密な関係を結んでいく上で重要なスキルであると述べている。高学年は、相互理解や受容、親密な自己開示が期待される。また、友人との共感や衝突を通してルールを体得し、人間関係力の基盤を作る時期であると考えられる。このことから、「頼み方」、「断り方」、「主張」、「問題解決」を高学年に配置した。

しかし、これら4スキルの教えやすさや学習効果を考慮すると、実施時期を早めることが適当であると考えられることから、中学年後期に配置することにした。小林（1999）は、「頼み方」、「断り方」、「主張」のスキルは、相手を受け入れながらも、自分の気持ちを伝えていくといった主張性のスキルであり、協力関係を形成していく上で重要なスキルであると述べている。また、「問題解決」は、葛藤解決スキルといわれており、江村ら（2003）は、中学生の不登校傾向行動の抑制には、葛藤解決スキルを教えることの必要性和不登校感情には、規律性、社会的はたらきかけ、主張性スキルを教えると改善できる可能性が高いことを示している。中学校1年生で不登校生徒が増加傾向を示していることから、必要なスキルであると考えられる。

続いて中学校について、渡辺ら（2003）は、中学生の発達課題から見て、小学生の時期とは異なったレベルのソーシャルスキルが要求される時期であり、ソーシャルスキルの確実な獲得が重要であると指摘している。したがって、中学校のスキル配置は、小学校で選定した14スキルの定着と中学生の発達段階から実態に即したスキル内容の取り入れていく必要があるといえる。所属校における不登校生徒の実態や近年の中学生の学校不適応や問題行動を考慮して、再度、「仲間の誘い方」、「あたたかい言葉かけ」、「頼み方」、「断り方」、「問題解決」といったスキルを配置した。

以上のように発達の観点を基本としたスキル配置を行った結果、14のスキルすべてについて中学校入学時までに配置することとなった。

このような発達の観点に基づくスキル配置によって子どもたちの発達に応じたSSTを実施することは重要であると考えられる。特に、低学年は家庭中心の生活からはなれ、学校という新たな生活の場

において、対人関係や集団生活などの経験をするようになる。ところが、近年、小学校入学時に、対人関係や集団生活の基本的なマナーやルールが身につけておらず、集団としてまとまらない等の状況が指摘されている。よって、発達、成長の特徴が顕著に現れる時期にスキルを導入し、早い時期から学級のすべての子どもたちが、共通のスキルを学習する必要があると考えられる。渡辺ら(2003)は、SSTによって、学級内のすべての人が同じソーシャルスキルの必要性を共有したということが、望ましい社会的スキルの促進につながったと指摘した上で、SSTを学級に開発的・予防的に適応することは大変有意義であると述べている。一方、研究2によるスキル配置は、子どもたちの実態を把握し、スキルを実施していくものであり、ソーシャルスキル教育の観点に基づくスキル配置であると考えられる。表1(中段)からも分かるように、このスキル配置はソーシャルスキル教育における一つの到達目標を示唆するものである。研究2のスキル配置はスキル未定着の児童生徒を対象に、発達の観点からのスキル配置は学級すべての児童生徒を対象としており、どちらの視点も重要である。ただし、発達の観点に基づくスキル配置は、研究2によるスキル配置(表1中段)と比較すると、前倒しの配置となっており、スキル未定着の児童生徒が多くなることが懸念される。そこで、授業等においてスキルの具体的なやり方を学ぶ導入期、学んだスキルを授業の中だけでなく、日常生活の中で実行できるように促していくために定着期を設けた。

ソーシャルスキル教育は、人間関係上の問題の解決をはかるのではなく(嶋田ら, 2004)、予防的・発達の介入を基本とする教育であるため(佐藤, 2005)、早い時期からの取り組みが有効であると指摘されている。したがって、小中一貫教育においてソーシャルスキル教育を実施する場合、本研究での配置のように、発達の観点に基づき、小学校段階から早期にスキル配置を行うことは大変重要であると考えられる。その一方で、スキル未定着の児童生徒が、未定着の状態を継続してしまわないように、教員のニーズから得た到達目標までに定着期を設けた。全体としては、小学校は、「スキル獲得」の時期、中学校は、「スキル運用」の時期として位置付けることができるであろう。

プログラム実施に際しての留意点および今後の課題

プログラム実施に際しての留意点として、第1に、児童生徒の実態に応じては、定着期に再度、スキルの導入を行うことも必要であることが挙げられる。児童生徒の実態やスキルの定着状況を考慮しながら、個別の対応も含めて展開することが重要であると考えられる。第2に、学習したソーシャルスキルを定着させるためには、日常生活場面で実行できるよう促す必要があると考えられる。よって、定着期において、日常生活で使用できる手立てや実行したときに適切な評価がなされる環境を整えることが重要であると考えられる。今後の課題として、第1に、表2の結果から「ありがとう」、「ごめんなさい」、「あいさつ」の3スキルは、現場の教員が小学校入学以前のスキル習得に対して、比較的高いニーズを持っていると判断することができる。また、佐藤ら(1998)は、幼児期がソーシャルスキル指導に最適であると指摘しており、将来的には保育所、幼稚園と連携したSSTについて検討する必要があると考えられる。第2に、学校現場で実施する際、授業時間の確保は大きな課題であると思われる。授業時間での展開は望まれるが、無理なく、さらには効果的に進めていくには、小野寺ら(2003)が指摘するように、SSTの要素や手法を日常的な教育活動の中に取り入れ展開するといった工夫が必要であると考えられる。

引用文献

- 相川 充・津村俊充 1996 社会的スキルと対人関係. 誠和書房.
- 堂野恵子 2000 思いやり能力の発達—親子関係, 仲間とのあそび, 友だち関係—. 児童心理6月号 金子書房.
- 江村里奈・岡安孝弘 2003 中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究. 教育心理学研究, **51**, 339-350.
- 江村里奈・岡安孝弘 2003 中学校の社会的スキルと不登校傾向の関係. 宮崎大学教育文化学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, **10**, 81-89.
- 井上健治・久保ゆかり(編) 1997 子どもの社会的発達. 東京大学出版会.
- 石川悦子 2003 発達段階に見る友だちづくりの変化—小学校上学年/中学生—. 児童心理4月号臨時増刊.
- 川原誠司 2004 友だち関係の変化が子どもにもたらすこと—生涯発達の視点から—. 児童心理11月号 金子書房.
- 木下芳子(編) 1992 対人関係と社会性の発達(新・児童心理学講座8). 金子書房.
- 小林正幸・相川 充(編) 1999 ソーシャルスキル教育で子どもが変わる(小学校). 図書文化.
- 松永あけみ 2004 子どもの社会性はどう発達するのか. 児童心理2月号 金子書房.
- 小野寺正己・河村茂雄 2003 学校における対人関係能力育成プログラム研究の動向—学級単位の取り組みを中心に—. カウンセリング研究, **36**, 3, 272-281.
- 佐々木和義・小関俊祐・蓑崎浩史・百瀬愛・細谷美奈子・東谷祐子・山本容子 2005 友人関係場面における児童用社会的スキル尺度の作成—小・中学校教員が小学生に求める社会的スキルの調査から—. 日本行動療法学会第31回大会発表論文集, 268-269.
- 佐藤正二・佐藤容子・岡安孝弘 1998 保育所における幼児の対人行動訓練の実践的研究—社会的スキル指導マニュアルの開発—平成9年度受託研究・研究成果報告書
- 佐藤正二・立元 真 1999 児童生徒の対人関係と社会的適応・予防的介入. 教育心理学年報, **38**, 51-63.
- 佐藤正二・相川充(編) 2005 実践! ソーシャルスキル教育小学校. 図書文化.
- 嶋田洋徳・鈴木伸一(編) 2004 学校, 職場, 地域におけるストレスマネジメント実践マニュアル. 北大路書房.
- 渡辺弥生・山本弘一 2003 中学生における社会的スキルおよび自尊心に及ぼすソーシャルスキルトレーニングの効果—中学校および適応指導教室での実践—. カウンセリング研究, **36**, 3, 195-205.
- 矢野喜夫・落合正行(共著) 1993 発達心理学への招待 人間発達の全体像をさぐる. サイエンス社.